

チェルノブイリ原発事故23周年の集い

繰り返さないで！チェルノブイリ

4月26日・2時～4時半

ドーンセンター (5階・視聴覚スタジオ)

地下鉄谷町線・京阪、天満橋下車、徒歩5分(下記の地図を参照下さい)

プログラム

☆報告：

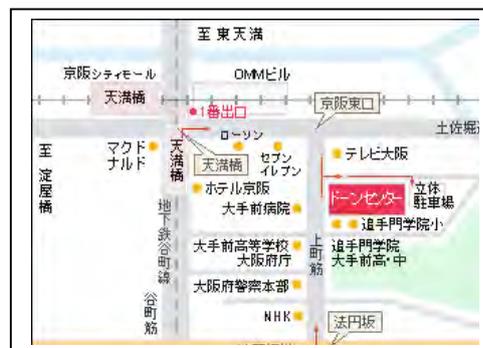
- 1.チェルノブイリ事故処理作業従事者の新たなデータの紹介／事故25周年に向けての課題
- 2.日本でも、繰り返さないで！チェルノブイリ:地震、老朽化…危険な日本の原発の閉鎖・廃炉を！

☆トーク：長崎被爆者・山科和子さんに聞く

～「先輩ヒバクシャ」からチェルノブイリ・ヒバクシャへの想い～

☆ビデオ上映、詩朗読、など(予定)

チェルノブイリ事故から23年。事故を境に、人生が大きく変わってしまった、チェルノブイリのヒバクシャ。今なお放射能汚染と向かい合いながら暮らしている汚染地の人々。20年以上経って、やっと統計的にも明らかにされつつある事故処理作業従事者の健康被害。来年65周年を迎える広島・長崎原爆被爆者の体験と想いとも重ねながら、チェルノブイリの今とこれからを考えてみたいと思います。また、日本でもチェルノブイリを繰り返さないために…私たちに何ができるか…ともに語り、取り組みましょう。



*ベラルーシ民芸品などの「チェルノブイリ救援バザー」もあります！

*「集い」への賛同よろしくお願ひします！（賛同カンパ：個人500円/団体一口1000円）

主催：チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西

「集い」問合せ先：0797-74-6091 (たなか), 0798-44-2614 (ふりつ), <cherno-kansai@titan.ocn.ne.jp>

「救援関西」発足17周年の集いを終えて

2008年12月14日、エル大阪で「発足17周年の集い」を持ちました。

早いもので、もう17周年です。今年は、現地での保養プログラムの実行と今後の課題、チェルノブイリを知らない世代にどう伝えるかの2点を課題に集まりました。

はじめに、代表の長崎ヒバクシャの山科さんが、私たちがチェルノブイリの被災者救援を始めた原点について話しました。原爆の被爆体験・ほとんどの肉親知人を一瞬に失ったこと・激しい体調不良・差別・生活苦・孤独・憎しみから、世界のヒバクシャの共通の願いに思いを広げたこと。チェルノブイリ事故直後、旧ソ連へ招かれた時、事故を隠そうとする政府高官に「今後私たちと同じ人々がたくさんでできます」と告げたこと。

次に、2008年の現地訪問の様子を映像を交えて、事務局の振津さんが報告しました。いつものように支援カンパを届け、実情視察（汚染状況・健康状態などの入手・ベラルーシ原発計画の近況・国の支援体制の現状・若い世代が事故をどのようにとらえているか）を行いました。今年度は保養プログラム開始で、ベラルーシの被災地の子どもたちが私たちの支援で「ノボキャンプ」に初めて参加したことが報告されました。「ノボキャンプ」はロシアの非汚染地で地理的に近く、私たちの支援レベルの費用で参加可能であり、子どもたちと青年の自主的で積極的な活動があるのが特徴で、ベラルーシの現地の子どもたちに元気を与えてくれるのではないかと期待しています。そして、昨年「プラスカ」（子ども保護施設）の子どもたちに頼まれていた、日本の子どもたちからの絵と手紙も渡してきました。お返事も預かってきたので早速訳してもらい、絵を描いてくれた日本の子どもたちに届けなければね。（訪問報告の詳細は、2～8ページに掲載。）

通訳として、一緒に訪問した山崎（前田）さんは、10年ぶりの訪問です。物価上昇とレートの変化で、ドルでの援助の金額が同じでも向こうでの価値が下がり、支援が難しくなってくるのでは…と心配になったことなど報告しました

休憩を挟んで、日本の若い世代にとっても生まれる前の「あの日」を、ダンスコアポッシブルのバレエで表現してもらいました。ダンスコアポッシブルはこども役を新しいメンバーで再構成してバージョンアップしていました。「目に見えないものの恐怖」「取り返しのつかない悲しみ」現地の友人たちは、「あの日からすべてが変わってしまった」という表現をします。今でも赤ちゃんが生まれるとき「うれしいことなのに、何かあるのではないかと怖くて」と涙ぐみます。感情を伝えることは難しいけど、バレエはことばとはまた別の形で何かを伝えてくれたように思いました。

最後に、初めて参加された方を含めて、参加者それぞれの思いを語ってもらいました。「未来の地球のためチェルノブイリのことを子どもたちに伝えたい」という高校の先生、「広島出身でヒバクシャのことに係る機会を持ちたいと思っていた」、「バレエをきっかけにチェルノブイリを知っ



た」という中学生、「広く社会問題に関心がある」「日本の原発が心配だ」「ヒバクの怖さを知りました」・・・この一人一人の思いを次の行動につないでいきましょう。（長澤由美）

訪問日程：

- 1 2月1日 関空発—フランクフルト着 <フランクフルト泊>
- 2日 フランクフルト発—ミンスク着。ベーラさんにお迎え。<クラスノポリエ泊/ベーラさん宅>
- 3日 クラスノポリエで、学校/ソーマチカ幼稚園/障害者センター/病院を訪問。今年の夏に「ノボキャンプ」での保養に参加した子どもたち4人と会って、感想などを聞く。
- 4日 チェリコフへ移動し、バーリャさんとともにプラレスカ（子どもの保護施設）とコロソク幼稚園を訪問。プラレスカの子どもたちには、日本の子どもたちからの手紙を届ける。<チェリコフ泊/バーリャさん宅>
- 5日 ミンスクへ移動。途中でベリニチの寄宿学校を訪問。<ミンスク泊/ターニャさん宅>
- 6日 ターニャさん、ジャンナさんと話し合い。ミンスク市街でバザー用品のおみやげ品の買い出し。<ミンスク泊>
- 7日 ミンスク発

【現地訪問報告】

振津かつみ

今回(2008年)のベラルーシ訪問は、ベラルーシ滞在が実質的に5日間という短いものでしたが、皆さんから寄せて頂いたカンパ(16ページ参照)やお便りなどを、各地に届け、交流し、また今後の取組みについても話し合ってきました。

出発前の運営会議では、「ベラルーシの原発はどうなったの?」「政府の被災者への施策の現状は?」「若い世代の人々がチェルノブイリ事故をどのようにとらえているのか?」「ロシアのノボ・キャンプでの保養に参加した子どもたちの感想は?」など、いろいろと見聞きしてくるようにと、皆さんから「宿題」をもらいました。また、いつも「救援関西」の催しで、すばらしいパフォーマンスをして下さるバレリーナの小谷ちず子さん、ソプラノ歌手の森田留美さんらとともに、できれば2年後を目標に、ベラルーシ現地で「交流講演」を実現したい…という計画の打診もしてくることとなりました。

汚染地クラスノポリエ 病院訪問

クラスノポリエの病院は、数年前に産婦人科病棟が閉鎖になり、その後は、ベット数90余り(外科25、内科48、小児科17、感染症4)で運営されています。その中には、お年寄りの「社会的入院」(病気ではないが、一人では生活できない、身寄りのないお年寄りをケアしている)のためのベットも含まれています。

病院の建物の外壁には、昨年にはなかった、「健康を増進させよう!」というスローガンを書いた大きな幕が張られてしまいました。ベラルーシ政府は、「西欧のレベルに早く追いつけ!」と、かけ声をかけてはいるようですが、実際には予算も十分になく、特にクラスノポリエのような地方の被災地では、ここ数年、医師不足も深刻です。そのために、例えば、胃カメラなどの機器もあるのですが、それを扱える医師がいなかったために検査できず、結局は他の大きな街の病院へ患者を送らねばならないのが実情です。

ベーラさんと院長先生の案内で、小児科外来と病棟を訪ねました。小児科外来は、ちょうど一ヶ月前に、以前感染症の病棟だった場所に「引っ越し」をしたところで、まだ十分に整備できていないようでしたが、以前の場所よりは少し広くなったような感じです。ここ数年、地区の子どもたちの健康データを全てコンピュータに入力して管理することになりました。その作業はベーラさんの

夫のニコライさんの担当です。コンピュータは国から支給されたものの、プリンターがなかったので、昨年の私たちの支援カンパの一部でプリンターを購入したとのこと。地区の子どもたちの長期的な健康管理のために少しでも役立ててもらえればと思います。

小児科病棟では、親がアルコール依存症などで育児放棄してしまった、2歳までの子どもたち3人が入院していました。このような境遇の子どもたちが、小児科病棟には常時数名いて、小児科のスタッフの皆さんが「親代わり」になって育てています。昨年、赴任したてだった若い小児科医の方に一年ぶりに再会し、「ちょっと賞禄が出て、お医者さんらしくなったね…」と、思わず感想を漏らしてしまいました。彼のような若い医師が、クラスノポーリエでも、引き続いて頑張ってもらえればと思います。

「汚染地での医療活動にあたって、特に注意して取り組んでおられることは」との問いに、院長先生は、「住民検診、職場検診などをしっかりやって、病気を早期に診断したり、予防したりすることが大切。残念ながら、住民の健康に対する意識はあまり高くないのが現状ですが、できるだけ検診を受けるようにと呼びかけています。」とお話でした。



「予防が大切です」と病院長先生

ソーヌチカ幼稚園



ソーヌチカ幼稚園では、園長先生と、私たちの招待で来日したことのある保母さんのガーリャさんが、出迎えて下さいました。昨年の私たちの支援カンパで、子どもたちのための「知育玩具」を作る材料などを購入したとのこと。これは、レザー張りのおおきな積み木のような形をしたクッションのようなもので、保母さん達が自分達で工夫して作ったとのこと。その「教育効果」（身体を動かしながら、子どもたちの創造性を高める）などを説明してくれました。

いくつかの子どもたちのクラスを訪ね、淡川典子さん（富山市在住の会員さん）が作って送ってくださった、折り紙でできた色とりどりの小さなかわいい「カエル」たちを、子どもたちにプレゼントしました。指で押すと飛び跳ねる「カエル」に、子どもたちは大喜びで、さっそく手に取って遊んでいました。

この幼稚園では、今年から「言語指導」のできる若い先生が赴任し、言葉の発達に問題のある子どもたち（園児165人中、11人）に、歌や遊戯を通じて、指導するクラスを始めたとのこと。そのクラスの子どもたちが先生と一緒に歌を披露してくれました。子どもたちが、遊び、楽しみながら、自然に言葉の問題を解決してゆけるようなプログラムのようです。

2008年の9月から幼稚園の給食費が少し安くなった（15ドルから10ドルへ）とのこと。2007年末に、政府は、住民への汚染地手当を廃止したのですが、一方で、このような配慮もしているようです。

障害児センター

このセンターは、教育委員会の方針で、ある幼稚園の一角に3年前に設立されたもの。これまで、自宅でしか過ごせなかった障害を持つ子どもたちが、集団で学んだり、遊んだりできるクラスノポーリエで初めてのデイケア施設です。現在、20人の子どもたちが通っています。クラスノポーリエ地区全体では、もっと多くの障害を持つ子どもたちがいるのですが、センターから遠い地域までは送迎ができず、まだ限られた子どもたちしかフォローできていないのが現状です。しかし、先生やスタッフの方々は、とても熱心に取り組んでおられます。

私たちが訪ねた日は、ちょうど「障害者デー」だったので、センターに通う子どもたちとその保護者の方々が招待され、ちょっとした催しがされていました。地域の小学校の子どもたちのグループが、人形芝居をして楽しませてくれ、一緒にケーキとお茶を頂いたりしました。子どもたちには、日本のお菓子や手作りのブローチなど、皆さんが準備してくれた「おみやげ」をプレゼントしました。

センターでは、昨年の支援カンパで、子どもたちのおもちゃ、教育の資料作成などのためのコン

コンピュータとプリンターを購入したとのこと。

アントーノフ記念学校

ノボキャンプに参加した子どもたちとの交流

以前に来日した先生のエレナさん、ラリーサさんらが、子どもたちと一緒に迎えてくれました。集まった子どもたちのうち、3人は、私たちの「保養カンパ」でこの夏、初めてロシアの非汚染地区の「ノボ・キャンプ」に参加した子どもたちです。今回は、ベーラさんが先生方と相談して、特に母子家庭の子どもたちを選んでキャンプに参加してもらったそうです。子どもたちは、20日間の「ノボ・キャンプ」での、様々な行事のこと、参加したサークルのこと、「ベラルーシの代表」として舞台でのパフォーマンスをやったりしたことなど…楽しかった様々な思い出を話してくれました。子どもたちは、キャンプから帰ってから、学校でも、他の子どもたちに自分達の体験したことなどを、いろいろと話したとのこと。キャンプに参加した子どもの中で、最年長の生徒が、詩を書くのが得意なカーチャ（エレナさんが来日した際に紹介してくれた詩の作者）でした。彼女が、日本の皆さんへ…と、アルバムを作成し、また詩を書いてくれました（10～11ページに掲載）。ノボキャンプはロシアのNGO「ラジミチ」が主催し、多くのボランティアの若い人々も参加しているユニークな保養キャンプです。カーチャも、大学生になったら、今度は自分もボランティアスタッフの一員として、子どもたちを連れて参加したいと、思いを語ってくれました。カーチャのような若い人々が、これからのクラスノポリエの未来を、ぜひ、支えて行ってほしいものだと思います。

大人達は、「キャンプから戻ってきた子どもたちは、目の輝きが違っていましたよ。」と、驚いたようです。ベーラさんは、「ノボキャンプは子どもたちの成長にとって、とてもいい機会になるようです。皆さんの保養支援プロジェクトのおかげです。これからもぜひ、続け、多くの子どもたちにそのような体験をさせてあげたい。」と、話していました。私たちも、試行錯誤でしたが、「保養支援」に取り組んでよかった！これからも続けたいと思いますので、どうぞよろしくをお願いします！



「放射能汚染について学ぶ特別教室」がオープン

昨年、この学校には「放射能汚染について学ぶ特別教室」が、開設されました。部屋にはチェルノブイリ事故による汚染地図などの資料が展示され、子どもたちが、自分達で資料を作成したり画像を見たりできるようにコンピュータが設置されています。（インターネットは繋がっていませんが。）また、地区で採れた作物や、食用にもされる可能性のあるキノコ、木の実、野生動物などのセシウムを自分達で測定できるように、測定器が設置されています。子どもたちは、自分達で食物などを測定して、乾燥させた食品や、野生動物などは、特にセシウム濃度が高いことなどを体験を通じて理解するようになったとのこと。

また、「森についてかんがえよう」という冊子が森林省から出されており、学校にもテキストとして配布されているようです。それには、各地区の汚染状況、どのキノコや木の実が放射能が高いか、どのようにして調理すればより濃度を低減することができるか…など具体的なことも記載されています。

事故から22年が経って、大人達は汚染に慣れてしまい、ともすればあまり注意を払わなくなってしまう中で、現実的に続いている汚染から、いかに身を守るかを、改めて子どもたちに教えなければならないのだと、思います。ベラルーシ政府は、汚染地への施策をどんどん切り捨てている一方で、子どもたちには、このような踏み込んだ教育を改めて始めざるを得ないという矛盾した態度をとっていて、それだけに事故の傷跡の深さを感じさせられました。

ベラルーシ政府は、最近、高校生を対象に「原発建設などに関するアンケート調査」を行ったそうです。その結果、42%が建設には「賛成」と答え、「自分の住んでいる地域に立てられるのであればいい」「安全に運転すればいい」と、答えた人が多かったとのこと。

汚染地チェリコフ

コロソク幼稚園

コロソク幼稚園は、コルホーズの附属幼稚園で、子どもたちが全員で29人(3～4歳:12人、4～6歳:17人)が通う小さな幼稚園です。ちょうどお昼寝の時間の直前だったので、今回は、楽しみにしていた子どもたちの歌と踊りはありませんでした。(ちょっと残念!) 子どもたちに会って、おみやげを渡した後、先生方とお茶を飲みながら話しをしました。

昨年の支援カンパで、通園費支援をした、ふたつの家庭の話を聞きました。ひとつの家庭は母子家庭で、母親はコルホーズで搾乳婦をしているが、アルコール依存のため、子どもたちの養育もままならない状態。幼稚園の先生や、地域の人々が、母親の立ち直りを促しながら、二人の子どもたちがちゃんと幼稚園に通えるようにフォローをしている。もう一つの家庭は、父子家庭で、父親は3人の子ども(そのうちの一人が幼稚園に通っている)を育てながら頑張っているとのこと。昨年の支援カンパで、幼稚園の庭の「電動芝刈り機」を購入。子どもたちの遊び場を整備するのに、「これまでは鎌で全部作業をしなければならず、とても大変だったので、大助かりです」と、先生達も喜んでおられました。

子ども保護センター「ブラレスカ」

このセンターは、親の身体的あるいは社会的理由(病気とか、アルコール依存のための育児放棄とか)で、子どもを養育できない状態の場合に、3～6ヶ月間、子ども達を一時的に保護し、同時に親の立ち直りを促すという施設です。「ブラレスカ」は、春に咲く花の名前で、センターのシンボル。

前年に訪問した際に「日本にも僕たちの所と同じようなセンターがあるの?」と、ある男の子に尋ねられ、「お手紙を書くから、届けて…」ということになり、手紙や絵を預かって帰りました。

日本に持ち帰って、「さて、どうしたものか…」と、運営会議で皆さんにも相談したところ、大阪市生野区にある「聖家族の家」の先生にお世話になることになりました。そして、そこで暮らしている子どもたちにベラルーシのお友達の話を話す機会を頂いて、ベラルーシから預かってきた手紙や絵を届けることができました。そして、今度は「聖家族の家」の子どもたちが、絵とメッセージを託してくれ、手紙は大阪外大生の那須智子さんが、露語に訳してくれ、絵とともに届けることができました。先生が読んでくれる日本の子どもたちの手紙を聞きながら、日本の景色やアニメを描いた絵を手にして、子どもたちは目を輝かせていました。



その後、子どもたちと一緒に手形を切り抜いて横長の紙に貼付け、「友情の橋」というのを創りました。嬉々として工作をする子どもたちの姿を見て、この子たちの創造力やエネルギー、だれもが享受できるはずの喜びを、世界中の、どの子たちからも奪ってはならないのだ…と、改めて思いました。

その後、先生方と、子どもたちのことや地域の人々の暮らし向きのことなど話している間に、子どもたちがさっそく日本のお友だちへ…と、絵とメッセージを書いてくれました。

昨年の支援カンパでは、子どもたちの学用品などを購入したそうです。

ベリニチの寄宿学校

ベリニチの寄宿学校は、家庭の事情で親が養育できない子どもたちで、多少なりとも「精神発達に問題がある」との診断を受けた子どもたちが、生活しながら学んでいます。ここには、イタリアのNGOが支援を続けており、施設の改築・修繕をボランティアでやったり、イタリアへの子どもたちの保養を受け入れたりしています。私たちも、毎年訪れ、支援カンパを届けています。昨年は、子どもたちの生活必需品などを購入したとのこと。

先生方が、子どもたちのために、いろいろと創意工夫をし



ニコライ校長ご自慢のエコロジー教室

て、その可能性を伸ばそうと努力されています。「今年は、ぜひ、この部屋を見て下さい」と、ニコライ校長に自慢げに連れて行かれたのは、「エコロジー学習の部屋」。壁一杯に、森や川、海などの、世界中の生き物や自然がリアルに描かれ、まるで「自然図鑑」の中に飛び込んだような気分になりました。絵の得意な先生が、自分で本や写真を見ながら、ひとつひとつ描いているのだとのこと。限られた資材や予算の中で、先生方が一生懸命に子どもたちと向き合っているのが感じられました。ニコライ先生には、「なぜ、いつも短時間しか寄らないんだ。もっとゆっくりして行けばいいのに…」と、文句を言われました。(いつもベリニチは通り道の「駆け足訪問」ですみません！でも、毎年欠かさずに訪問する私たちを友人としていつも歓迎してくれて、その一年間の「仕事の成果」を見せて下さいます。)

マリノフカの「移住者の会」

ミンスクのマリノフカでは、移住者の会のターニャさんのお宅にホームステイし、代表のジャンナさんとも一緒に、この一年間の活動などについて話しを聞きました。昨年支援カンパで、「移住者」の子どもたちのための新年のお祝い会、遠足などを企画したとのこと。また、「子ども元気キャンペーン」の資金で、13の家族にベビーフードを配布し、140人の子供たちにビタミン剤を配布できたとのこと。そして、今年は、一人暮らしのお年寄りを訪問する際に、「移住者の会」の若い人たちが一緒に手伝ってくれたそうです。ジャンナさんは、「若い人たちにも、もっと活動に参加してもらえるようにしてゆきたい」と、話しておられました。

学校の先生をしているターニャさんは、ミンスクでもクラスノポリエと同じく、「原発の是非について」のアンケートが高校生を対象に行われたことを話してくれました。「政府は、原発の危険性や問題点について、全く子どもたちに知らせず、このような調査だけをして、あたかも多くの若者が賛成しているかのように見せようとしている」と、憤慨していました。また、原発建設は政府が決めた方針なので、「学校では、教師が生徒に反原に反対するような話しなどは一切できないのだ」と、嘆いていました。そんな中でも、「チェルノブイリ事故による放射能汚染に関心を持って、汚染調査などにも取組み、『エコロジー問題についての研究発表』に応募して、ベラルーシ全国で2位の賞をもらった高校生がいる」と、本人の承諾を得てもらってきたという、その生徒の「発表論文」のコピーを渡してくれました。事故から22年経って、事故当時まだ生まれていなかった子どもたちの中に、チェルノブイリを自分の国の「エコロジー問題」としてとらえ、向き合おうとしている若い世代が育っていることを知り、ぜひ、そのような若者と日本の若者との交流ができれば…と、思っています。

人々の生活／チェルノブイリ被災者への施策

私たちの友人のベラルーシの一般の人々の暮らし向きは、あまり変わらないようです。年金や給与の額は、2-3年前と比べて多少(数十ドル)増えてはいるようですが、それでも年金は月170ドル~200ドルくらい。給与も同じくらい(年数や役職によっては300ドル以上の人も)。ただ、物価の方も、品物によって違いますが、やはり上がっているようです。(例えば、2年前と比べて、ミルク1リットル：700ルーブル→1300ルーブル、「カルバッサ」という太めのサラミソーセージ1キロ：8000→12000ルーブルなど)ベラさんの話しでは、4人家族で月々、食費だけで300-400ドルはかかり、家賃と光熱費で100ドルくらい。共稼ぎで、なんとかぎりぎりの生活というのが続いています。子どもの多い家庭では、月50~80ドルの「子ども手当」が、生活費として欠かせません。事故処理作業従事者に支給されていたわずかな手当(30ドル/年)は、2007年の暮れから打ち切られたとのこと。「その他のチェルノブイリ被災者への施策の動向は？」と、尋ねたところ、「しょっちゅう政府の施策が変わるので、自分達も全部フォローできないんだ。政府のホームページで調べてくれないか。」と、夫のニコライさんの返答でした。

とりあえず、私たちが訪問した昨年12月の初めの時点では、現在の世界的な経済危機の影響が特にベラルーシの人々の日常生活にも及んでいる…という感じではありませんでした。もともとベラルーシには、欧米の資本がそれほど入り込んでいるわけでもないからでしょうか。ただ、クラスノポリエなどの汚染地の人々は、若くて働ける男性のほとんどがロシアに出稼ぎに行っている状態なので、「ロシアでの景気後退で外国人労働者の首切りが始まっている」というニュースを聞くにつけ、私たちの友人の家庭の「お父さん」たちは、大丈夫だろうか…と、心配です。昨年末の「発

足17周年の集い」の際に、「ドルの価値が下がってきているので、救援金も目減りしてしまうのでは…」との意見も出ましたが、とりあえずは1ドル=2190ベラルーシル・ルーブルというレートは、2年ほど前とほぼ同じでした。ただ、物価も少しずつ上がっているのでは…やはり「目減り」しているのには違いありません。今後、私たちも、これまで以上に頑張って救援資金集めをしないと…と、改めて思います。

ベラルーシの原発建設計画

ベラルーシ政府は、やはり原発建設計画を進める意向のようです。クラスノポリエの近くも含めて、三ヶ所の立地点が検討された結果、昨年末に最終的にチェルノブイリの汚染地からは離れたリトアニアに接するグロドノ州のオストロベツカヤに決まったとのこと。立地点は、保養地としても知られる自然保護区の近くだそうです。クラスノポリエやチェリコフの近くでなければいい…というものでは決してないので、なんとか反対する手だてはないものか…と考え込んでしまいます。今年の2月になって、「ロシアが5億ドル出資してロシア単独のプラントを今年着工し、2020年にフル稼働の予定で、ベラルーシの3分の1の電力をまかなう」というプロジェクトを、ロシアのベラルーシ大使が発表したとのことですが、ロシアへの依存度が高まることに対する批判も、ベラルーシ国内にはあるようで…どうなることやら。

来年の「ベラルーシ交流講演」実現に向けて

バレリーナの小谷ちず子さん、ソプラノ歌手の森田留美さんらとともに実現させたい、ベラルーシ現地「交流講演」の提案については、クラスノポリエのベアさんが、快く受けて下さり、日程が決まれば、クラスノポリエの中心街にある「劇場」を予約しましょう、ということになりました。また、クラスノポリエの子どもたちとの踊りや詩の朗読のコラボレーションもできそうです。こちらでも、皆さんと相談しながら計画を練って、すばらしい「交流講演」になるようにしたいと思います。クラスノポリエ以外では、ベリニチの寄宿学校などでも「講演」が持てそうです。

最後になりましたが、今回は、昨年までモスクワから来て下さっていた通訳の松川さんが、「おめでた」ということで同行をお願いできず、「初代救援関西通訳」の前田ひろみさんに、無理を承知で通訳をお願いしました。急なお願いにもかかわらず、快く引き受けて下さったひろみさんに、この場をお借りして、御礼申し上げたいと思います。ベラルーシの皆さんも、久しぶりにひろみさんとも会えて、とても喜んで下さったので、よかったな…と思いました。

【感想文】久しぶりのチェルノブイリ被災者訪問

オプティミズムを忘れないで…

前田ひろみ

今回ピンチヒッターとしてほんとうに久しぶりに同行させていただきました。あまりお役に立てなかったのではと思いますが、なつかしい方々にお会いできてたいへんうれしかったです。十年一昔といいますが、ミンスクやモギリョフ州も印象がかなり変わっていました。車がたくさん走り、物があふれ、街並みもきれいになっていて、旅の中ではベラルーシの人々の生活の息吹のようなものを感じていました。世界経済の荒波のために物価高もひどく、政治的な閉塞感は相変わらずのようですが、やはり外から見るイメージと実際の生活は違いました。

今回いろいろな場所で、さまざまな困難の中でも自分たちの社会をよくするためにそれぞれの現場で日々奮闘されている方々にお会いして個人的にたいへん感銘を受けました。その社会や国を変えるのはこういう人々なのですね。当たり前のことですが、社会というのはやはり人がつくっているものだと思えました。個人ひとりひとは弱く世の中は問題が山積みでどこを目指し

ていったらいいか正直途方にくれますが、人にとって何が大切かということはどこでも同じで、それを守りたいという思いや志のようなものは国や時間をこえて伝わっていくものだと思います。オプティミズムを忘れないでいましょうとマリノフカのターニャさんがおっしゃっていましたが（ターニャさん、さすがですね）、これはすべての鍵でしょう。救援関西のご活動は日本とベラルーシのそのようなふつうの市民の思いを、長年の交流を経て細いけれど決して切れることのない糸でつないでいるのだと再認識しました。

これはぜひ書いておきたかったことですが、強行軍の旅中にもかかわらず、連日のように深夜までパソコンでお仕事をされていた振津さんの鬼気迫るエネルギーには頭が下がりました。でも、振津さん、あまり根をつめられるとそのうち倒れてもしかたないですよ。ほんとうに医者の不養生を絵に描いたような方だと思います。毎年の訪問を首を長くして待っている方々のためにどうぞもう少しお体を大切になさってください。

ありがとうございました。

ベラルーシの友人の皆さんからのメッセージ

親愛なる友人のみなさん

尊敬する山科さん

今回のかつみさんとひろみさんの訪問に感謝します。私たちは首を長くしてお二人の訪問をお待ちしておりました。それは、ソーヌシュカ幼稚園や病院、学校、障害児リハビリテーションセンターなどの古くからの友人との再会でした。対談の中でこの1年間の事業や、将来の計画、まだ解決していない課題、今後の協力関係などが話し合われました。長い年月にわたって皆さんの救援関西の活動が、チェルノブイリ事故によって生じた困難な問題とたたかうために私たちに力を与えてくださっていることに感謝いたします。

この1年間、私たちはいくつかのプログラムを実現するために努力してきました。いちばん重要なものは「健康プログラム」です。皆さんの支援により、心臓病の3人の子どもをミンスクへ精密検査に連れて行く交通費の支給と、家族が子どもの心臓の手術を行うための費用の援助、5人の子どもが特別な治療を受けに行くための交通費の支給ができました。このような援助は今後にも必要になってくると思われます。

二つ目のプログラムは「思いやり (ot serdtsa k serdtsu) プログラム」です。私たちはこの中で社会的支援を必要としている約40の家族を選びました。積極的な支援を行っており、皆さんの支援金からこれらの家族の子どもたちに食品、衣服、医薬品、ビタミンを購入しています。

三つ目は「共同の未来プログラム」です。このプログラムは、私たちの地区の子どもたちがロシアの保養合宿所「ノヴォキャンプ」に行ったことがきっかけとなり始まりました。この合宿所への子どもの派遣は皆さんの支援金によって実現しました。私たちはベラルーシや遠い外国で子どもの

保養を行うだけでなく、子どもたちが互いにいい経験を交換できるようにすることが重要であると考えました。それは、クラブ活動や子どもの好きな活動、新しい情報技術の獲得、日常の学習や仕事の中での新しい知識の応用などです。私たちは子どもたちが他の国の同年代の子どもたちとの交流の中で、日々の問題の解決での自分のかかわりや重要性を感じるようになってほしいと考えています。

希望を受け取った数十人の子どもたちを代表して、皆さんの支援にお礼を申し上げます。私たちと皆さんの協力関係が学生さんたちや教師たちに引き継がれることを期待しています。

この機会をかりて皆さんにクリスマスと新年のお祝いを申し上げます。皆様のご健康とご多幸をお祈りしています。今後も皆さんの会がますます発展しますように。

尊敬と感謝をこめて

ヴェーラ、ヴァーリャ、サーシャ、レーナ

2008年12月

ベラルーシ、クラスノポーリエ

(訳：前田ひろみ)

ノボ・キャンプに参加したカーチャからの手紙

尊敬する日本の友人の皆さん

保養センター「ノヴォ・キャンプ」に2008年6月3日から21日まで滞在した、私たち、クラスノポーリエ地区の国立ギムナジウム生（カーチャ、チモフェイ）と、クラスノポーリエ市中等普通教育学校生（アリョーナ、ヴラッド）は、ベラルーシ共和国外での保養の機会を与えてくれたこのプロジェクトの組織委員会に対し、心からの感謝の気持ちを表します。私たちは、ボランティアの人々の熱意と才能、自らの仕事への創造的なアプローチ、高い技能に感動しました。また、すばらしい思い出となった同世代の仲間との交流にも感謝しています。

心から感謝している

ノヴォ・キャンプに関係するすべての人々に

私はその人々に自分の詩を捧げたい

ここには熱い気持ちと私の告白がこめられている

子どもの時よりすばらしい時代はない

それは憧れにたとえられる

あふれるような笑い声、夢の飛翔は

子ども時代が望んでいること

それを助け守ることは

人、市民として義務である

他に大切なものは何もないだろう
伸びていくたおやかな瞳よりも

わたしたちはあらゆる才能を伸ばした
さらに1年、2年を経ると
素人とはいえなくなる
青年になったときには

ノヴォ・キャンプをなんども思い出す
哀しいときや喜びの瞬間に
なぜならそれはたくさんの子どもたちに
明るい世界への通行証を与えてくれたから

それは人生の輝かしいページ
私のあこがれ、私の人生のチャンス
いつか私もボランティアになって行きたい
あなたを魅了するために

最後になりますが、皆さんにクリスマスと新年のお祝いを申し上げます。この地球上にあるもっとも美しいものが皆さんのもとにありますように。皆さんのすばらしい活動が成功しますように。なぜなら人を助けることは、人としてもっとも高い次元にあることですから。

尊敬と感謝をこめて、カーチャ、クラスノポーリエ
2008年12月 クラスノポーリエ

(訳：前田ひろみ)

2008年11月12日 道明寺中学校で「チェルノブイリ訪問報告」講演

濱塚哲朗

2002年のベラルーシ現地訪問からはや6年。当時まだ学生だった僕が言った「いつか自分の生徒にこの話を伝えていきたい」という言葉通り、現在勤務している道明寺中学校の一年生を対象に久保さんと講演をしてきました。

6年も前のことで、久々の講演でもあったので、どこまで伝えていけるかは心配でしたが、長澤君のパワーポイントの助けもあり、なんとか5、6時間目の2時間分公演をしていけました。生徒

には予備知識として事前学習はしてもらっていましたが、どこまで入っているかはわからなかった
ので、ベラルーシの位置や事故の概要から話をしていきました。2002年の現地訪問のビデオはそ
こそこ見入っていたようですが、さすがに現地の話は生徒たちには実感がわきにくいのか、微妙な
反応でした。生徒にはやはり自分の身近なところにつながる話が反応が良いらしく、事故当時日本
にまで放射能が飛んできた話や、日本の原発の話、特にチェルノブイリとベラルーシの距離よりも
福井と大阪の距離の方が近いという話には興味を持ってもらえたらしく、感想文も日本のことにつ
いて触れているものが多かったように思います。

1時間半ほど間にビデオ・クイズ等を挟みつつ、話をしましたが、普段の授業の様子から見ても、
子ども達にしっかりと理解してもらうのは難しいことだとは思いますが。今回の講演ではチェルノブ
イリのこと、日本の原発のことを、まず知ってもらうことで、今後の考え方に影響を与えられたら
と、思いました。



生徒の感想 道明寺中学校 1年

この間は、チェルノブイリのお話を聞かせていただいて、ありがとうございました
いました。チェルノブイリの原発で世界各国の人々が苦しんでいることがよく分かりました。

このような事故が日本にもいつ起こるかかわからないことなので、色々な世界の人々が助け合っ
てチェルノブイリで起こった原発事故のようなものをなくしていかなければならないと思いま
した。20年以上前の事なのに、今でも苦しんでいる人がたくさんいると知って、原発事故は一度
起こると、とても長い間人々が苦しまなければならないということが分かって、あらためて、私た
ちが住んでいる場所が今とても幸せだと思いました。けれどだからこそ、世界で苦しんでいる人々
を助けてあげたいと思いました。

本当に大切なお話ありがとうございました。

(T. 女子)

11月12日はありがとうございました。昔に原子力発電所で事故がおこって放射能が世界にば
らまかれて汚染されていったことを教えてくれてありがとうございました。爆発場所から250km
はなれている所で危険地域になって、大阪でも近いところで100kmしかはなれていないことを聞
いてびっくりしました。放射能を出している原子力発電所にかこいをしたけど、いつくずれるかわ
からないと言われるとゾッとします。もうただごとではないんですねと思いました。

大切なことを教えてくれてありがとうございました。

(O. 男子)

ベラルーシという国は知らなかったけど、ヒバクシャの事に関することはもっとしらなかったの
でとても勉強になった。放射能で汚染されたものばかりで何も口にできないのはとてもかわいそう
だった。1回のことだけで何人もの人がぎせいになるのはかわいそうでした。

チェルノブイリのこととはとても勉強になり、こんな事があったというのも知れて良かったです。

(M. 男子)

いそがしい中、私たちにお話を聞かしてくださってありがとうございました。

戦争じゃなく、事故でも人々がたくさん苦しんでいることがわかりました。原子力発電所は、たくさん発電できるけど、とても危険なことだなあと思いました。「放射能」が人々や動物・植物にまで被害をあたえているということであらためて知りました。今の日本はとても平和で幸せだと思いました。そして、今の日本の人々、世界の人々が、戦争や事故の恐ろしさを分かっていたかたないといけないと思いました。

本当にいろいろお話を聞かせてくれてありがとうございました。

(M. 女子)

2008年11月15日

大阪府立三原高等学校で国際交流大バザール開催

久保きよ子

毎年、チェルノブイリヒバクシャ救援関西にも声をかけていただき、参加させていただいています。2008年のテーマは「燃える大地に響き渡サンバのリズムとフォークの歌声」と題し、ステージでは明るいサンバの曲に合わせてダンスや歌が披露されました。

私たちは(木下さんと2人)毎年の定まっている場所で、ベラルーシグッズと、古着コーナーを繰り広げました。マトリョーシカは学生さんに人気が、今回は特に携帯ストラップにもできる小さなマトリョーシカが、完売しました。古着は生徒さん達はじめ、先生や一般の奥様方まで、幅広くご協力をいただきました。

今の高校生は、チェルノブイリ原発事故は、知りません。そこで、場所から覚えていただきます。ウクライナ、ベラルーシ国の地図から始まって、日本までの距離、そして事故の大きさ、今もまき散らされた放射能が消えていないこと、日本にも原発が55基も立っていることなど、いろいろ話しました。話すことはたくさんあります。

お昼は、スリランカのカレーやタイの汁ビーフン、韓国のチジミなど、国際色豊かな食べ物に舌鼓をうちました。

私たちも、他のお店で、ベラルーシ訪問時のおみやげ用として、鉛筆やタオル、ハンカチなどなど、買い物を楽しみました。

毎年、11月の第3土曜日です。皆さんも一緒に参加しませんか。

お箸袋には箸キャップがついてなきや (ツプ)



救援関西では毎年ベラルーシに支援金を届けるために、あれやこれやとカンパ集めの努力を続けています。支援金を得ると、チェルノブイリ原発事故の影響やベラルーシの風物を知っていただくのに一石二鳥なので、これまでいろいろな絵葉書を作ってきました。協力してくださる方のおか

げで、ただ今販売中ののはもう四代目か五代目です。

私も何かやらなくてはと、手作り品をみなさんに押し売りしてカンパにしています。

一昨年から昨年にかけてはビーズで作った“ 9の字ストラップ”（9条を守るんだ！）で多くの方にカンパいただきました。ありがとうございます。現在も進行中、まだまだ在庫がありますので、これからもどうぞよろしく！

だけど同じことをやっていると飽きるので、昨年秋はお箸袋作りに励みました。

ずいぶん昔になりますが、西宮で巡回手作りバザーを行っていたころ（年に5・6回は地域の集会所やら市民館を借りてバザーをやってました。公園課に申請してリサイクルバザーを市の公園でやったこともあった！～あの頃は若かったなぁ～）もお箸袋を製作、外出の際にはそれぞれがマイ箸持参でエコってました。

でも マイ箸持参中のみなさん、お箸を使ったあとはどうなってます？

そのまま袋に入れて持って帰るとお箸だけじゃなく袋も洗わないといけないし、ティッシュでくるむのならエコにならないし。悩み多き日々をお過ごしだったのではないのでしょうか。

かく言うわたくしも毎回袋を洗うのが面倒でいつしか使うのをやめてました。息子は「別に平気」と言って、お茶や水でお箸をすすただけでそのまま使い続けているけど、お箸の先で袋に穴があいたと申しております。

この大問題を解決するグッズを某デパート食器売り場で発見！プラスチックのお箸キャップ。鉛筆のキャップを大きく平たくしたようなもので、洗いやすいようにパカッと開くようになっています。これだわ！（こんなことで喜んでるのだから単純です）

でも値段がねえ。100円は高いよ。あんまり需要がないからだろうけど。

1つ買ってみました。説明書を読むと、なんと話題(古いか?)の小浜市のメーカーのものでした。

ここで 考えることはなんとか工場直売で安くならないか、ですよね。そこで申し訳ないことに、福井の知り合いを頼ることを思いつきました。どんぐり倶楽部の石地さん、すみません。手紙を書いてお箸キャップを安く分けてもらえないかの交渉をお願いしたのです。

石地さんは工場までわざわざ出かけて交渉してくださったのですが、私を買ってからしばらくグズグズしていたせいで、値上がりして、定価150円！ これってあんまりだと思いませんか。少々頑丈にしたからといって5割高。石地さんは「どうしましょうかね？ 一応まとめ買いをするからというので120円まで値引きをお願いできましたけど」とのこと。

う～ん どうしようか。私をもっとすばやくお願いしていたら・・・と後悔しながらも、お箸袋の新案はこれもデパートでいただき済み（買わないのに「このお箸袋どうなってますの？」と尋ねて袋をあけて見せてもらった）で、すでにキャップつきでお箸袋を売り出すというアイデアが私の中では決定事項になっていたから、泣く泣く値上がりを呑むことに。

またしても石地さんが工場に出向いて、救援のことを話して115円（消費税込み）まで交渉して、支払いもして、荷造りして送っていただきました。

という ありがたい経過でお箸キャップが手に入ったわけです。

その間私も袋を縫ってましたよ。値段交渉なんていうやっかいごとをお願いしたのだから、こっちもやることやっておかなかっちゃ。

それで秋の集会から、お箸袋の押し売りが始まったのでした。すでにお箸袋を持っておられるエコな方にはキャップだけでも販売しています。この場合は150円（お店では157円のところ）です。35円はカンパとさせていただきます。

みなさん 福井の石地さんのおかげですから、彼の苦労を無にしないように、ご協力よろしくお願いいたします！！

おまけに敦賀の朝市でお箸袋の販売もしてくださった石地さん、救援関西のメンバーでいると大変やなあとお思いでしょうが、これからもよろしくお願いいたします。

(～歩くカンパ箱～ 体型も箱型になりつつある たなかでした)

米寿を迎えて

山科和子

皆様、有り難く、厚く御礼申し上げます。

今日を迎えられた事は、皆様のお力添えと励ましによるものと、痛感して、涙にむせんでおります。

ピカーと光り、一瞬の轟音とともに、数十万の市民を焼き殺し、町を焼け野が原にした原爆!!

長崎で、両親弟妹を失い、独り生き残った私!! 長崎医大の偉い先生方も「市内は焼け残っているから、何時、空襲を受け

るかも判らない。ここにいる方が安全だよ。」と、言われ、地べたに伏し、故父母の焼死体にすがりつき伏した、夜、夜、...

あれから63年、ヒバクシャなるが故に、下宿を追い出され、職場を解雇され、重なる病苦と貧苦に幾度、死の宣告を受けたことか??

1988年、「長崎の鐘」をソ連に贈呈する行事に、大阪より独り参加。ウクライナに入り、チェルノブイリ原発の被害を知り、「ヒバクの先輩」として、何かお役に立つことがあればと、チェルノブイリ救援運動に参加。1996年には、爆発した4号炉のすぐ側まで入って見ました。あれから23年、当時生まれたばかりの子どもたちも、きっと立派に成人されたでしょう。しかし、放射能障害は...? 何度か「死」を考えた私も今では「生きていて良かった」「独りで生きているのではない」「皆に支えられ、励まされ、助けられて、生きているのだ」と、痛感するようになりました。

ベラルーシの皆様へ、「史上最悪の放射線を受けた、あなた方。負けず、頑張っ、それを逆手に取り、強く生きて後世に語り伝えて下さい。」



山科さん米寿を祝う会にて

